

クラシック音楽は「芸術」と言われており、娯楽的な音楽とは区別されています。では、「芸術」とはどのようなものを指すのでしょうか。芸術を英語では、culture（カルチャー）、ドイツ語では、Kultur（クルトゥアー）とありますが、両方とも、「耕す」という語源を含んでいます。つまり、長い期間を書けて、大切に育てられたものという意味があります。そのため、クラシック音楽には、300年前から培われた、「よい音楽」とはなにか、という定義があります。「よい音楽」が決まっているといいますと、演奏者は個性や感性をどこで表わすことができるのか難しく感じますね。クラシック音楽には、一定の決まりがあり、長い年月、その決まりを守りながら、伝統を継承していかなければなりません。そのために、現在も音楽を専門とする大学があり、そこで、歴史や伝統を学ばなければならないのです。技術だけを習得するなら、専門学校でも独学でも学べるのです。「芸術」と呼ばれるクラシック音楽は、楽譜を音符通りに弾けるだけでは不十分なのです。

「よい音楽」については、すでに17世紀から、「音楽書」が出版されていて、18世紀、19世紀には、ピアノ演奏法の著書がいくつも書かれています。CFE バッハ（1714～1788 大バッハの息子）やピアノ教師のテュルク（1750～1813）、練習曲で有名なチェルニー（1791～1857 ベートーヴェンの弟子）などが、「よい音楽」、「よい演奏」について、ほぼ同様な項目で述べています。例えば、強弱、拍子感、リズムの正確さ、音質などについて、解説しています。その後、20世紀、現代にもたくさんのピアノ演奏法の著書が書かれています。が、「よい音楽」、「よい演奏」の定義は、ほぼ同じです。その定義を実践するための方法はさまざまですし、その定義の幅は、演奏者にゆだねられていますが、伝統を守ることが、よい演奏につながるという点は、変わりません。

文化圏に暮らす世界中の人々のほとんどが、長調は明るく、短調は悲しく感じますし、音が上向すると気持ちが盛り上がり、下降すると落ち着くという感覚を持ちます。また、音量が小さいと優しい気持ちになり、大きいと興奮します。それらの感覚は、人間がもともと持っているようです。その自然な感覚から外れると違和感や不快感をもちたりするのです。すると、「よい演奏」には聞こえなく、なんとなく「よくなかった」と思うのです。強弱など、その幅には、演奏者の裁量に任されており、その部分で演奏家の個性が表れ、そこに聴衆の好みも加味され、演奏家の評価となることが多いようです。

このように「よい音楽」の定義をきちんと知っていると、クラシック音楽の聴き方がわかりやすくなります。現在は、ユーチューブなどインターネットが発達し、「よい音楽」も「悪い音楽」も混在して耳に入ってくるようになりました。その中から「よい音楽」を選び出して聴くには、「よい音楽」の定義を少しだけ学んでみることをお勧めします。「芸術」と言われるクラシック音楽を楽しむには、好みや感覚だけではなく、いくつかの項目（強弱や音質など）に注目して見る必要があります。そのため、残念なことに、クラシック音楽は敬遠される傾向にありますが、少しだけ定義を知るとぐっと楽しめると思います。